

伊豆諸島八丈小島のゾウムシ上科甲虫

小島弘昭

〒 243-0034 厚木市船子 1737 東京農業大学昆虫学研究室

Weevils from Hachijō-Kojima Island, the Izu Islands, Japan

Hiroaki KOJIMA

Summary: Weevils collected from Hachijō-Kojima Island, the Izu Islands, Tokyo, and preserved in the Laboratory of Entomology, Tokyo University of Agriculture were examined. A total of 22 species in four families were recognized including nine species new to the island.

八丈小島は八丈島の西約 7.5 km に位置する面積 3.08 km² の小島で (Fig. 1), 住民の集団離島にともない 1969 年以降無人島となっている。八丈小島の甲虫相は梅谷 (1956) および沢田・渡辺 (1958) により報告され、ゾウムシ上科甲虫については 4 未同定種を含む 2 科 16 種が記録されている。無人島化してからの調査ならびに報告は、甲虫類に関しては知られていない。

著者は沢田・渡辺 (1958) の報告の基となった東京農業大学昆虫学研究室に所蔵されている同島産の標本を検する機会を得るとともに、最近訪島した浅野真氏の採集品を見る機会を得、同島未記録種を含む 4 科 22 種のゾウムシ上科甲虫の存在を確認したので、これまでの記録と合わせて以下に報告する。このうちキクイムシ科の 3 種については沢田・渡辺 (1958) の報告以降、とくに新知見はないので省略する。

八丈小島新記録種については、種名の後に * 印を付した。また、本文中で採集者名は以下の通り略記する：渡辺泰明 (YW) ; 水沢清行 (KM) ; 長島保雄 (YN) 。

報告に先立ち標本を検する機会を与えて頂いた東京農業大学名誉教授の渡辺泰明博士ならびに、八丈小島のゾウムシ類標本を提供頂いた浅野真氏 ((株) 帝装化成) に厚く御礼申し上げる。なお、本研究は科学研究費補助金 (24510333) の助成を受けて行われた。

ヒゲナガゾウムシ科 Anthribidae

1. ビロウドノミヒゲナガゾウムシ *Choragus velutinus* Johraku, 1953

13 個体の標本に基づき記録されたが、全個体貸出されており、今回検することができなかった。

2. *Araecerus* sp.

梅谷 (1956) で記録された種で、伊豆諸島からは同属のワタミヒゲナガゾウムシ *A. coffeae* (Fabricius, 1801) とアカアシヒゲナガゾウムシ *A. tarsalis* (Sharp, 1891) の 2 種が記録されている。どちらかの種の可能性が高いが、標本を検していないので、本種の扱いは未同定種のまま保留とする。

3. キスジヒゲナガゾウムシ *Aphaulimia debilis* (Sharp, 1891)*

1 ex., Utsugi Vill., 23. vii. 1958, YW.

沢田・渡辺 (1959) で上記データのアカミヒゲナガゾウムシ *Tropideres rufescens* Roelofs, 1891 (= *Litocerus secures* (Boheman, 1839)) の記録があるが標本が見当たらず、本種の誤同定の可能性がある。

伊豆諸島では新島以南の島々に分布する (妹尾, 1987; 平野ら, 1993; 川畑, 2011)。

チョッキリゾウムシ科 Rhynchitidae

4. クロケシツブチョッキリ *Auletobius uniformis* (Roelofs, 1874)

1 ex., Utsugi Vill., 25. vii. 1958, KM.

伊豆諸島ではほぼ全島に分布する (Morimoto & Miyakawa, 1985)。

ゾウムシ科 Curculionidae

5. サビヒョウタンゾウムシ *Septicus griseus* (Roelofs, 1873)

1 ex., Toriuchi-Vill., 16. vii. 1958, YN; 1 ex., 16. vii. 1958, KM; 1 ex., 18. vii. 1958, YW; 5 exs., 18. vii. 1958, KM.

沢田・渡辺 (1959) でハチジョウヒョウタンゾウムシ *Septicus hachijoensis* Kôno として記録された種で、その後、森本 (1962) により本種のシノ

ニムとされた。

伊豆諸島では全島に分布する (Morimoto & Miyakawa, 1985).

6. ハチジョウシギゾウムシ *Curculio hachijoensis*
Morimoto, 1962

2 exs., Toriuchi-Vill., 18. vii. 1958, YW.

沢田・渡辺 (1959) で *Curculio* sp. として記録された種で、その後、Morimoto (1962) により上記標本と同じデータの八丈小島産 1 雌を副模式標本として本種が記載された。

伊豆諸島では青ヶ島を除く全島に分布する (Morimoto & Miyakawa, 1985).

7. ハチジョウノミゾウムシ *Rhamphus hisamatsui*
Chûjô et Morimoto, 1960 *

1 ex., 16. vii. 1958, YW; 2 exs., 18. vii. 1958, YW.

沢田・渡辺 (1959) で *Rhamphus* sp. として記録された種で、その後、Chûjô & Morimoto (1960) により八丈島産の標本をもとに記載された。

伊豆諸島では全島に分布する (Morimoto & Miyakawa, 1985).

8. ヤサイゾウムシ *Listroderes costirostris* Schoenherr,
1826

1 ex., 17. vii. 1958, YW.

移入種で、伊豆諸島では大島、三宅島、八丈島、青ヶ島から見つかっている (渡辺・相馬, 1972; Morimoto & Miyakawa, 1985; 川畑, 2011).

9. オリーブアナアキゾウムシ *Pimelocerus perforatus*
(Roelofs, 1873)*

1 ex., Toriuchi-Vill., 16. vii. 1958, YN; 1 ex., Utsugi-Vill., 23. vii. 1958, YW.

伊豆諸島ではほぼ全島に分布する (Morimoto & Miyakawa, 1985; Kojima, 2011; Kojima & Zhang, 2013).

10. マダラカレキゾウムシ *Acicnemis maculaalba*
Roelofs, 1875*

2 exs., Utsugi-Vill., 23. vii. 1958, YW; 3 exs., 25. vii. 1958, KM.

沢田・渡辺 (1959) で *Acicnemis* sp. として記録された種。

伊豆諸島ではほぼ全島に分布する (Morimoto & Miyakawa, 1985).

11. ボウサンクチカクシゾウムシ *Catabonops monachus* Roelofs, 1875

1 ex., Utsugi-Vill., 19. vii. 1958, YW.

伊豆諸島では全島に分布する (Morimoto & Miyakawa, 1985).

12. *Catabonops* sp.

沢田・渡辺 (1959) で上記学名にて報告されたが、所蔵標本中にそれらしき個体が見当たらなかった。その後、Morimoto & Miyakawa (1985) により *Colobodellus postfasciatus* として記載された種の可能性もあるが、標本が見つかるまで本種の扱いは保留とする。

13. モンクチカクシゾウムシ *Sclerolips maculicollis*
(Morimoto, 1962)*

1 ex., Utsugi-Vill., 23. vii. 1958, YW.

伊豆諸島では三宅島以南の島からのみ知られる (Morimoto & Miyakawa, 1985).

14. ヒサゴクチカクシゾウムシ *Simulatacalles simulator* (Roelofs, 1875)

4 exs., 23. vii. 1959, YW.

伊豆諸島では全島に分布する (Morimoto & Miyakawa, 1985).

15. ムナビロマルクチカクシゾウムシ *Orochlesis amplicollis* Morimoto et Miyakawa, 1985*

1 ex., Toriuchi-Vill., 18. vii. 1958, YW.

沢田・渡辺 (1959) で *Orochlesis takaosanus* Kôno として記録された種で、その後、Morimoto & Miyakawa (1985) により伊豆諸島産の種は別種 (本種) として記載された。伊豆諸島では全島に分布する (Morimoto & Miyakawa, 1985; 小島・張, 2012).

16. ヒメクチカクシゾウムシ *Syrotelus umbrosus*
(Roelofs, 1875)

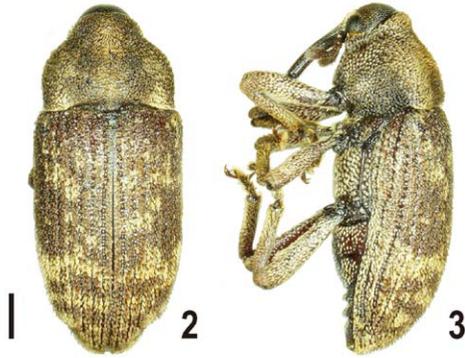
1 ex., Utsugi-Vill., 18. vii. 1958, YW; 1 ex., 23. vii. 1959, YW; 1 ex., 25. vii. 1958, YW.

伊豆諸島ではほぼ全島に分布する (Morimoto & Miyakawa, 1985).

17. ハチジョウヤサクチカクシゾウムシ
Metempleurus hachijoensis Morimoto et Miyakawa,
1985* (Figs. 2, 3)

6 exs., Toriuchi-Vill., 18. vii. 1958, YW.

八丈島と石垣島のみから知られ (Morimoto & Miyakawa, 1985), 個体数は少ない。



Figs. 1-3. Photographs of Hachijō-Kojima Is., viewed from Hachijō-jima Is. (1) and habitus of *Metempleurus hachijoensis* (2: dorsal; 3: lateral). Scale bar = 1 mm.

18. アカネニセクチプトクイゾウムシ
Stenoscelodes hayashii Konishi, 1962*

1 ex., Utsugi-Vill., 22. vii. 1958, KM; 1 ex., 23. vii. 1958, YW.

伊豆諸島ではほぼ全島に分布する (Morimoto & Miyakawa, 1985).

19. ハマベクイゾウムシ *Dryotribus mimeticus*
Horn, 1873*

1 ex., 八丈小島, 3. i. 2014, 浅野真採集.

伊豆諸島では伊豆大島から青ヶ島まで広く分布する (Morimoto & Miyakawa, 1985).

今回の報告で八丈小島から新たに9種の分布新記録種が追加された。これまでの研究からも指摘されているように八丈小島の生物相は近接する八丈島のそれと密接に関連する。ゾウムシ上科においてもヒゲナガゾウムシ科の1種のピロウドノミヒゲナガゾウムシと未同定の2種を除き、すべて八丈島との共通種である。また、八丈小島から記録のある種の大半は伊豆諸島に広く分布する種で、三宅島以南の南伊豆諸島のみ分布する種は、モンクチカクシゾウムシとハチジョウヤサクチカクシゾウムシの2種のみである。

引用文献

- Chūjō, M. & K. Morimoto, 1960. Curculionid-beetles from the Hachijō Island (1). *Entomological Review of Japan*, 11: 3-6.
- 平野幸彦・上田泰之・渡 弘・吉田篤人, 1993. 伊豆新島産甲虫類採集報告. *神奈川虫報*, (104): 1-12.
- 川畑喜照, 2011. 伊豆諸島八丈島の甲虫VIII. *神奈川虫報*, (173): 53-62.
- Kojima, H., 2011. Record of some weevils new to the fauna of Hachijō-jima and Aogashima Islands, the Izu Islands, Japan. *Elytra*, (n. ser.), 1: 341-342.
- 小島弘昭・張 辰南, 2012. 伊豆諸島利島から新たに記録されるゾウムシ上科甲虫. *さやばねニューシリーズ*, (8): 17-19.
- Kojima, H. & C. Zhang, 2013. Weevils newly recorded or confirmed from Mikura-jima Is., the Izu Islands, Japan. *Elytra*, (n. ser.), 3: 179-181.
- Morimoto, K., 1962. Revision of the subfamily Curculioninae from Japan II (Coleoptera). *Mushi*, 36: 21-40, 5 pls.
- Morimoto, K. & S. Miyakawa, 1985. Weevil fauna of the Izu Islands, Japan. *Mushi*, (50): 19-85.
- 沢田玄正・渡辺泰明, 1958. 八丈小島の昆虫相. *農学集報*, (5): 47-62.
- 妹尾俊男, 1987. 東京都に生息するヒゲナガゾウムシ科甲虫について (I). *中央大学付属高等学校 教育・研究*, (1): 73-82.
- 梅谷献二, 1956. 伊豆小島の昆虫相. *生態昆虫*, 5: 137-142.
- 渡辺泰明・相馬州彦, 1972. 三宅島の昆虫相. *農学集報*, (17): 1-56.

(2014年4月7日受領, 2014年5月25日受理)

伊豆諸島八丈島産ゾウムシ上科甲虫の分布資料

小島弘昭¹⁾・川畑喜照²⁾

¹⁾ 〒 243-0034 厚木市船子 1737 東京農業大学昆虫学研究室

²⁾ 〒 100-1511 八丈町三根 1784-2

Distributional data of the weevils from Hachijō-jima Is., the Izu Islands, Japan

Hiroaki KOJIMA and Yoshiteru KAWABATA

Summary: Distributional data of some weevils (Coleoptera, Curculionoidea) previously recorded from Hachijō-jima Is., the Izu Islands, Tokyo are emended and corrected since it became clear that these records had been based on misidentification. Eight species are omitted on record from Hachijō-jima Is. and/or the Izu Islands, but nine species are newly added to the fauna. Resultingly, a total of 123 species, which is the highest in number among the Izu Islands, of weevils excluding Scolytidae and Platypodidae are known from the island.

伊豆諸島八丈島産のゾウムシ上科甲虫に関する記録は古くからあり (Kôno, 1927, 神谷・山本, 1935; 正木, 1937; Chûjô & Morimoto, 1960 など), 伊豆諸島のゾウムシ相をまとめた Morimoto & Miyakawa (1985) の研究で, ヒゲナガゾウムシ科とキクイムシ科, ナガキクイムシ科を除くゾウムシ上科がまとめられた。この時点で, 同定等に疑問のある過去の古い記録も含めると, 62 種の記録がある。ヒゲナガゾウムシ科は妹尾 (1987) が東京都の記録をまとめた報告の中で, 八丈島産種についても扱い, 8 種の分布を確認している。その後, 最近になって, 野津 (2010) や沢田 (2010) および川畑 (2011), Kojima (2011, 2012b) によって追加記録が報告され, 現在までに計 8 科 122 種の記録がある。なかでも, 著者の一人で八丈島在住の川畑による 2011 年の報告は長年の調査結果に基づく, 多数の新記録種を含むもので, 近年の業績としてはもっとも重要なものと言える。

著者の一人小島は最近, 川畑の報告に使われた標本を検査する機会を得て, 以下のような種について記録の訂正ならびに追加を確認したので報告する。また, Kojima (2011) で記録した 1 種も誤同定であったので, あわせて訂正するとともに, 近年の調査によって新たに分布が確認された種についても報告する。

報告にあたり, 土壌性ゾウムシ類の調査ならび採集に協力頂いた東京農大の小島誠史, 清水雄貴の両氏に厚く御礼申し上げる。なお, 本研究は科学研究費補助金 (24510333) の助成を受けて行われた。

伊豆諸島あるいは八丈島からの記録を削除すべき種

1. アカアシヒゲナガゾウムシ *Araecerus tarsalis* (Sharp, 1891)

枯れ木等に各地で普通に見られる種で, 伊豆諸島では三宅島から記録がある。八丈島からの記録 (川畑, 2011) は, 近似のワタミヒゲナガゾウムシ *A. coffeae* (Fabricius, 1801) の誤同定であった。よって, 本種の八丈島からの記録を削除する。

2. ウエノキクイサビゾウムシ *Dexipeus uenoi* Morimoto, 1978

これまで琉球列島からのみ知られていた種で, 八丈島三根産の 1 個体に基づき記録されたが (川畑, 2011), 伊豆諸島から記載されたミヤケクイサビゾウムシ *Orthosinus japonicus* Morimoto & Miyakawa, 1985 の誤同定であった。よって, 本種の伊豆諸島からの記録を削除する。

3. ミドリクチプトゾウムシ *Cyphicerus viridulus* (Roelofs, 1873)

北海道から九州にかけて分布する種で, 伊豆諸島からの記録はなかった。草地で得られた八丈島産の少数個体に基づき記録されたが (川畑, 2011), 近年八丈島で異常発生し, ヒサカキの害虫となりつつある国内外来種サカグチクチプトゾウムシ *Oedophrys sakaguchii* (Kôno, 1930) の誤同定であった。よって, 本種の伊豆諸島からの記録を削除する。

4. ケバクチプトゾウムシ *Lepidelistomodes fumosus* (Faust, 1882)

神津島までの北伊豆諸島を含む本州から九州,

韓国に分布する。スダジイから得られた八丈島産の複数個体に基づき記録したが (Kojima, 2011), コクロホシクチプトゾウムシ *L. kokurohoshi* Kojima & Morimoto, 2006 の誤同定であった。よって、本種の八丈島からの記録を削除する。

5. ナカグロカレキゾウムシ *Acicnemis kiotoensis* Nakane, 1963

本州から琉球列島, 台湾まで分布するが, 伊豆諸島からの記録はなかった。八丈島産の複数個体に基づき記録されたが (川畑, 2011), これまで伊豆諸島からも記録のあるマダラカレキゾウムシ *A. maculaalba* Roelofs, 1875 の誤同定であった。よって, 本種の伊豆諸島からの記録を削除する。

6. クリアナアキゾウムシ *Pimelocerus exsculptus* (Roelofs, 1875)

北海道から九州の本土部に広く分布するが, これまで伊豆諸島からの記録はなかった。八丈島産の複数個体に基づき記録されたが (川畑, 2011), コクロアナアキゾウムシ *P. cribratus* (Roelofs, 1873) の誤同定であった。よって, 本種の伊豆諸島からの記録を削除する。

7. タイワンモンクチカクシゾウムシ *Sclerolips horridus* Heller, 1931

佐多岬以南から琉球列島, 台湾まで分布する種で, ごく近似の種であるモンクチカクシゾウムシ *S. maculicollis* (Morimoto, 1962) が本土部および南伊豆諸島に分布する。両種の間関係については今後, 分類学的な再検討を要するが, ここでは従来の記録に従い, 八丈島産の個体はモンクチカクシゾウムシとしておく。よって, 本種の伊豆諸島からの記録を削除する。

8. マツコブキクイゾウムシ *Xenomimetes destructor* Wollaston, 1873

北海道から九州にかけて分布する種で, 伊豆諸島からの記録はなかった。八丈島産の少数個体に基づき記録され, 小形の個体と記述されているが (川畑, 2011), 伊豆諸島から記載されたホソコブキクイゾウムシ *Xenomimetes tenuis* Morimoto & Miyakawa, 1985 の誤同定であった。よって, 本種の伊豆諸島からの記録を削除する。

未同定種として記録された種で種名が確定した種

1. クロクチカクシゾウムシ *Catagmatus japonicus* Roelofs, 1875

Catagmatus sp. として記録されたが (川畑, 2011), 伊豆諸島に比較的広く分布し, 八丈島からも記録のある上記種であった。

2. オオナガキクイゾウムシ *Oxydema longula* (Boheman, 1859)

Oxydema sp. として記録されたが (川畑, 2011), 八丈島を含む伊豆諸島から記録がある上記種であった。

誤同定

1. ワモントゲトゲゾウムシ *Colobodes ornatus* Roelofs, 1875

八丈島産の複数個体に基づき, 上記種として記録されたが (川畑, 2011), 標本を検した結果, 1 個体 (1 ex., 中之郷, 5. ix. 2001) を除き, ネジキトゲトゲゾウムシ *C. ornatoideus* Morimoto, 1988 の誤同定であった。ワモントゲトゲゾウムシはネジキトゲトゲゾウムシと比べ八丈島をはじめ伊豆諸島では個体数が少ない。

伊豆諸島あるいは八丈島から新たに記録される種

1. ワタミヒゲナガゾウムシ *Araecerus coffeae* (Fabricius, 1801)

前述の通りアカアシヒゲナガゾウムシとして記録された種で (川畑, 2011), 八丈島からは新記録となる。著名な貯穀害虫で, 八丈島には物資の流通の過程で侵入したと思われる。

2. ヒメケブカホソクチゾウムシ *Sergiola praecaria* (Faust, 1889)

<検視標本> 6 exs., 甚太, 18. v. 2012, 小島弘昭 採集・保管。

伊豆諸島ではこれまでに神津島からの記録があるのみで (小島, 2011), 八丈島からは新記録となる。ウツギ類から得られる。

3. ミヤケキクイサビゾウムシ *Orthosinus japonicus* Morimoto & Miyakawa, 1985

前述の通りウエノキクイサビゾウムシとして記録された種で (川畑, 2011), 伊豆諸島ではこれまで三宅島と御蔵島からそれぞれ土壤中より得られた 1 個体のみが知られる非常に珍しい種で, 八丈島からは新記録となる。

4. コクロホシクチプトゾウムシ *Lepidepistomodes kokurohoshi* Kojima & Morimoto, 2006

前述の通りケブカクチプトゾウムシとして記録

された種で (Kojima, 2011), これまで伊豆諸島からの記録はなかったが, 最近, 伊豆大島でも見つかった (Kojima *et al.*, in press). 八丈島からは新記録. スダジイより得られるが, 島内での産地はやや局所的.

<追加検視標本> 7 exs., 檜立, 16. v. 2012; 1 ex., 中之郷, 19. v. 2012; 12 exs., 底土, 4. vi. 2013, すべて小島弘昭採集・保管.

5. エノキノミゾウムシ *Orchestes horii* (Kôno, 1930)

<検視標本> 49 exs., 三根, 3.VI.2013, 小島弘昭採集・保管.

伊豆諸島からはこれまでに伊豆大島, 新島, 御蔵島, 三宅島から記録があり (Morimoto & Miyakawa, 1985; 小島・藤澤, 2011; Kojima & Zhang, 2013), 八丈島からは新記録. エノキの葉を加害する.

6. ヒラセノミゾウムシ *Orchestes dorsoplanatus* Roelofs, 1874

<検視標本> 1 ex., 防衛道路, 3. vi. 2013, 小島弘昭採集・保管.

伊豆諸島からはこれまでに伊豆大島, 新島, 神津島から記録があり (小島, 2011; Kojima, 2012a; Kojima & Zhang, 2013), 八丈島からは新記録. スダジイから得られる.

7. コクロアナアキゾウムシ *Pimelocerus cribratus* (Roelofs, 1873) (Fig. 1)

前述の通りクリアアナアキゾウムシとして記録された種で (川畑, 2011), 八丈島のみならず伊豆諸島から新記録となる. 本州, 四国, 九州から朝鮮半島に分布するが, 産地は局所的で生態は未知 (Morimoto, 1982; 小島・森本, 2004).

8. ウエノヒョウタンクチカクシゾウムシ *Hytanzou uenoi* Morimoto, 1962

<検視標本> 1 ex., 大賀郷金山土, 7. vi. 1997; 1 ex., 末吉 (こん沢, 材), 21. vi. 1998; 1 ex., 三根, 5. v. 2001. すべて川畑喜照採集・保管.

伊豆諸島では利島から記録があったのみで (Morimoto & Miyakawa, 1985), 八丈島からは新記録となる.

9. オオシマヒサゴクチカクシゾウムシ *Simulatacalles oshimaensis* Morimoto & Miyakawa, 1985 (Fig. 2)

<検視標本> 4 exs., 中之郷, 11. v. 2012, 小島誠史・清水雄貴採集 (土壌を採取し, ツルグレンにて抽



Figs. 1–3. Habitus photographs of weevils new to the fauna of Hachijō-jima Is. and habituation of *Scepticus uniformis* on the island. — 1, *Pimelocerus cribratus*; 2, *Simulatacalles oshimaensis*; 3, habituation of *S. uniformis* (note the piled sand, which was brought from off-island).

出), 小島弘昭保管.

伊豆大島から記載された種で, その後, 本州 (和歌山), 四国, 九州からも見つかった (Morimoto & Lee, 1992; 的場, 1999). 八丈島からは初記録となる.

まとめ

今回の報告により, キクイムシ科とナガキクイムシ科を除く八丈島産ゾウムシ上科甲虫の総種数は123種となった. はじめにも記したとおり, この中には古い記録で, 同定や産地表記に疑問のある種も含まれており, 将来検討を要する. 八丈島産のゾウムシ上科種数は伊豆諸島中最大で, 面積(69.5 km²)は2番目に大きい, 本土(東京)から南方に287 kmと2番目に遠く離れた島で, これだけの種数が分布することは大変興味深い. Morimoto & Miyakawa (1985)でも指摘されており, 伊豆諸島のゾウムシ相は南部に行くに連れ, 琉球列島との共通種の割合が高くなる傾向がある. 本土要素に琉球要素が加わることで八丈島に生息する種数が増えていると考えられるが, これ

以外に人為的な移入種の定着も近年無視できない状況になりつつあり、新たに発見される種にそのような種が少なくない。ここ 10 年程の間に定着したと考えられる国内外来種だけでも、ワタミヒゲナガゾウムシ、イネミズゾウムシ、シバオサゾウムシ、サカグチクチプトゾウムシ、チビコフキゾウムシ、ヤサイゾウムシ、ダイコンサルゾウムシ、マツノシラホシゾウムシ、ニセマツノシラホシゾウムシ、アルファルファタコゾウムシ、ヒラヤマメナガゾウムシと 11 種におよび、国内外来種の数も伊豆諸島中もっとも多い。温暖な南西諸島方面からの観葉植物や観光開発、公園整備にともなう根つき植樹の大量持ち込みが行われており、それに紛れて侵入したものが大半と考えられる。これら移入種の中にはサカグチクチプトゾウムシやヒラヤマメナガゾウムシなど、異常発生し害虫化している種も存在する (川畑, 2011)。さらに、近年、これまで記録のなかった海浜性のトビイロヒョウタンゾウムシが、底土港脇の海岸から見つかった (沢田, 2010)。この場所は海水浴場として整備された場所で、伊豆諸島外からも砂を持ち込んでいるとのことで (港湾作業関係者私信)、本種はその砂に混じって持ち込まれた可能性が高い (Fig. 3)。

八丈島のゾウムシ相はまだ完全に解明されたわけではなく、今後も上述のような過程で、新たな種が人為的に侵入する状況が続くと、新たに見つかった種が在来種なのか移入種なのかの区別ができない状況になりかねず、島の生態系への影響のみならず、島の生物地理学的研究を行う上での支障をきたす恐れがあり、状況を注視して行く必要がある。

引用文献

Chûjô, M. & K. Morimoto, 1960. Curculionid-beetles from the Hachijô Island (1). *Entomological Review of Japan*, 11: 3-6.

- 神谷一男・山本 玄, 1935. 八丈島産甲蟲類目録 (豆南諸島昆虫分布資料 III). *昆虫*, 9: 228-231.
- 川畑喜照, 2011. 伊豆諸島八丈島の甲虫 VIII. *神奈川虫報*, (173): 53-62.
- 小島弘昭, 2011. 伊豆諸島神津島から新たに記録されるゾウムシ上科甲虫. *さやばねニューシリーズ*, (4): 20-21.
- Kojima, H., 2011. Record of some weevils new to the fauna of Hachijô-jima and Aogashima Islands, the Izu Islands, Japan. *Elytra*, (n. ser.), 1: 341-342.
- Kojima, H., 2012a. Additional record of weevils new to the fauna of Izu-Ôshima Island, the Izu Islands, Japan (Coleoptera, Curculionioidea). *Elytra*, (n. ser.), 2: 144.
- Kojima, H., 2012b. Additional record of weevils new to the fauna of Hachijô-jima Island, the Izu Islands, Japan (Coleoptera, Curculionioidea). *Elytra*, (n. ser.), 2: 150.
- Kojima, H. & C. Zhang, 2013. Weevils new to the fauna of Niijima and Shikine-jima Islands, the Izu Islands, Japan. *Elytra*, (n. ser.), 3: 183-184.
- 小島弘昭・藤澤侑典, 2011. 伊豆大島から新たに記録されるゾウムシ上科甲虫. *さやばねニューシリーズ*, (4): 9-11.
- 小島弘昭・森本 桂, 2004. 日本産ゾウムシ上科のオンライン目録とデータベース. *九州大学総合研究博物館報告*, (2): 33-147.
- Kôno, H., 1927. Beitrag zur Kenntnis der Attelebiden-Fauna Japan. *Insecta Matsumurana*, 2: 34-45.
- 正木十二郎, 1937. 豆南諸島に於ける昆虫相に就いて (第 1 報). *昆虫*, 6: 80-93.
- 的場 纈, 1999. 和歌山県産ゾウムシ科目録. *和歌山県立自然博物館館報*, (17): 29-51.
- Morimoto, K., 1982. The family Curculionidae of Japan. I. Subfamily Hylobiinae. *Esakia*, (19): 51-121.
- Morimoto, K. & S. Miyakawa, 1985. Weevil fauna of the Izu Islands, Japan. *Mushi*, (50): 19-85.
- Morimoto, K. & C. E. Lee, 1992. Curculionidae from Cheju Island, Korea, with descriptions of three new species (Insecta, Coleoptera). *Esakia*, (32): 1-18.
- 野津 裕, 2010. 東京都八丈島のシギゾウムシ. *神奈川虫報*, (172): 13-14.
- 沢田佳久, 2010. 海浜性トビイロヒョウタンゾウムシの二島嶼からの発見. *日本生物地理学会会報*, 65: 163-167.
- 妹尾俊男, 1987. 東京都に生息するヒゲナガゾウムシ科甲虫について (I). *中央大学付属高等学校 教育・研究*, (1): 73-82.

(2014 年 4 月 7 日受領, 2014 年 5 月 25 日受理)

【短報】ジンサンシバンムシ成虫の野外における越冬例

ジンサンシバンムシ *Stegobium paniceum* (Linnaeus, 1761) は、乾燥食品などに付く食品害虫とされ、屋内で発見される例が多い一方で、ハトの巣などを源として野外でも発生することが知られている。その生態については、「越冬態は幼虫で、成虫は西日本では、保温性の良い一般家屋で 4 月中～下旬に出現する」(酒井, 1995)、あるいは「年 1～3 回の発生で、幼虫で越冬する」(「イカリ消毒の害虫診断・駆除商品情報サイト」より引用)と

されている。

筆者は、本種の成虫が東京と横浜の市街地において、成虫で野外越冬しているところを複数回確認しているため報告する。

1ex., 東京都目黒区碑文谷, 13. I. 2013; 1ex., 神奈川県横浜市都筑区新栄町, 10. II. 2013; 1ex., 東京都目黒区大岡山, 12. I. 2014 (採集個体はすべて筆者保管)。

これら 3 個体の成虫の越冬場所は、それぞれいづれもケヤキの樹皮下で、図 1 のように他の昆虫と共に越冬していた。採集して手の上に載せたり



図1. ジンサンシバンムシの越冬状況.



図1. クロキマダラケシキスイ.

日光を当てたりするとほどなく動き出したので、仮に採集しないでそのままの状態で居続けていれば、春になって気温が上がるのを待って活動を始めるものと思われた。

末筆ながら、本報告を助めていただいた岩田隆太郎氏に厚くお礼申し上げます。

引用文献

酒井雅博, 1995. シバンムシ p. 268-270. 日本家屋害虫学会編, 家屋害虫事典, 井上書院, 東京.
イカリ消毒の害虫診断・駆除商品情報サイト: <http://www.ikari.jp/gaicyu/12020d.html#top>

(上田衛門 152-0032 東京都目黒区平町 1-16-11)



図2. ムナクボヒラタケシキスイ.

【短報】東京都区内で冬季の夜間に樹液に来ていたケシキスイ類の観察例

東京都区内の、とあるポイントでは、数本のアカガシおよびシラカシの幹から、ひと冬を通して樹液が流れ続けている（または滲み出ている）。それらの樹液の流れ口には、木屑が溜まっていたり小さな穴が開いていたりすることから、樹液が出ているのはカミキリムシ類の幼虫が冬季にかかわらず幹の中で活動している作用によるものと見られる。筆者は、その樹液を2013年末から2014年初にかけてひと冬の間、不定期ながらおよそ7~10日置きの間隔で夜間（20時から22時の間のいずれかの時刻）に観察を続けたところ、真冬の時期を含め、ケシキスイ科の2種が樹液で活動していることが認められたので、報告する。

活動していた2種のうちの一つは、クロキマダラケシキスイ *Soronia lewisii* Reitter, 1884 である。本種の採集・目撃記録は、次のとおり。

1ex., 東京都目黒区八雲, 22. XI. 2013; 11exs., 同所, 30. XI. 2013; 3exs., 同所, 4. XII. 2013; 3exs., 同所,

11. XII. 2013; 2exs., 同所, 22. XII. 2013; 3exs., 同所, 28. XII. 2013; 2exs., 同所, 1. I. 2014; 1ex., 同所, 4. I. 2014; 1ex., 同所, 12. I. 2014; 1ex., 同所, 25. I. 2014; 1ex., 同所, 18. II. 2014; 4exs., 同所, 26. II. 2014; 1ex., 同所, 28. II. 2014.

筆者がこの観察を始めたのは、おおかたの甲虫が活動しなくなる11月下旬のことで、アカガシの樹液で1個体を見つけたのが、筆者にとって本種との初めての出会いだった。その後、シラカシの樹液でまとまった数の個体が見つかり、そのシラカシの樹液が涸れた後も、アカガシで何頭か個体を見出すことができた。1月から2月にかけての厳冬期に入ると、夜間の気温は東京都区部でも5℃を優に下回り、時には零度近くとなることもあるが、そのような寒冷な状況下でも、数はきわめて限られていながら、本種の個体を幹の表面に見出すことがあった。そのような個体は、さすがにほとんど身動きすることなくじっとしていたが、ライトを照らし続けたり落ち葉の柄で突いたりすると動き出したので、冬眠中ではなく明らかに活動中であることが伺われた。また、2月下旬の、辺りに雪

の塊が残っているような夜にも、交尾をしているペアの個体を観察した。

なお、樹液が涸れた木では、樹液が出ている間に見られていた個体たちがその木ではまったく見られなくなる。姿を消したそれらの個体は、気温が低い中で別の木の樹液を求めて移動したとはとても思えず、おそらく樹皮下に潜り込んで休眠態勢に入っていたのではないかと推測される。すなわち、冬の間、樹液という食餌にありつく個体もいれば、じっと休眠中の個体もいるということであって、樹液で見られる個体数が非常に少なかったことからすれば、後者の方が多数であろうと思われる。

ちなみに、観察時間を夜間にしたのは、仕事がある筆者にとって夜間の方が継続的・安定的に観察を続けられるという理由によるものであった。また、本種が夜間に数個体集まっている樹液場を試みに昼間にチェックしてみたところ、1頭も見られなかったため、冬季といえども本種が主に活動をするのは夜間であると思われた。

さて、クロキマダラケシキスイは、東京都区部におけるいくつかの記録を見る限り、主に5月から7月にかけて活動していることが伺われる。例えば、皇居においては、本種は6月にまとまった数の個体が記録されている（野村ほか，2000）。また、大田区（大田区，1997）と明治神宮（岡田ほか，2013）における調査では、本種の記録は5月から7月の間に限られている。これに対して、本観察のポイントとなったアカガシとシラカシは、春になって気温が上がり夏に向かっていくと、カミキリムシの幼虫の活動が変化するためか、多くの樹液が涸れてしまう。このポイントにおけるクロキマダラケシキスイは、そのようなポイント固有の環境変化に適応した結果、気温の低い冬季にも活動する個体を維持しているのだとすれば、非常に興味深いことであると思われる。

もう一方の種は、ムナクボヒラタケシキスイ *Eपुरaea (Eपुरaea) foveicollis* Reitter, 1873 である。本種の採集・目撃記録は、次のとおり。

1ex., 東京都目黒区八雲, 30. XI. 2013; 2exs., 同所, 4. XII. 2013; 3exs., 同所, 11. XII. 2013; 1ex., 同所, 4. I. 2014; 1ex., 同所, 25. I. 2014; 1ex., 同所, 28. II. 2014; 1ex., 同所, 9. III. 2014.

本種も、11月下旬から3月上旬にかけての毎月、クロキマダラケシキスイほど頻繁には見られなかったものの、樹液またはその近くの幹の上に個体を見出すことができた。本種を見出した数がクロキマダラケシキスイと比して少なかったのは、

クロキマダラケシキスイは都区部においても普通種である一方、本種は東京都で未記録であり、そもそも個体数が少ないことを理由とするものではないかと思われた。また、本種についても、おそらくは、樹液に来る個体のほかに、樹皮下等で休眠態勢に入っている個体が（むしろ多く）並存しているのであろう。

本種の観察もクロキマダラケシキスイの観察と同時に夜間に行ったが、本種がそもそも夜行性であるかどうか筆者は知らない。クヌギ等の樹液に集まる他のケシキスイ類の例からすると、むしろ夜間に活動が活発化する種が多く、本種についても、冬季といえども、夜間に観察することで活動中の個体が見つかる可能性が高まったものと考えている。

さて、ムナクボヒラタケシキスイの成虫の活動期間は、通常冬季にも及ぶのだろうか。東京都では本種の記録がそもそもないが、横浜市南部を中心とする円海山地域の調査では、本種は6月と7月のほかに12月にも記録されている（円海山地域自然調査会，2000）。それにもかかわらず、本種が1月から2月にかけての厳冬期においても樹液において活動していたことは、観察記録として価値のあるものではないかと思われる。

なお、ムナクボヒラタケシキスイは、区内の別の場所（目黒区駒場）の雑木林内における吊り下げ式 FIT（衝突板トラップ）にも春先に数頭落ちたことがあり、その記録も参考までに下に掲げておく。本種は、少なくとも東京都目黒区においてはそれほど珍しくないように思われる。

1ex., 東京都目黒区駒場, 28. IV. 2013; 1ex., 同所, 2. V. 2013; 1ex., 同所, 6. V. 2013.

末筆ながら、ムナクボヒラタケシキスイについて筆者の採集個体の同定をしていただいた久松定智氏に、心よりお礼申し上げる。

引用文献

- 野村周平・平野幸彦・齊藤明子・上野俊一・渡辺泰明, 2000. 皇居の甲虫相. 国立科学博物館専報, (36): 220-222.
 岡田圭司・平野幸彦・新里達也, 2013. 鎮座百年記念第二次 明治神宮境内総合調査報告書 明治神宮の甲虫類, 303.
 大田区, 1997. 大田区自然環境保全基礎資料調査報告書 大田区の昆虫, 138.
 円海山地域自然調査会, 2000. 円海山域の昆虫. 神奈川虫報, (130): 198.

(上田衛門 152-0032 東京都目黒区平町 1-16-11)

【短報】 ミナミウスイロツツハネカクシの分布について

ミナミウスイロツツハネカクシ

Clavilispinus exguus

(Erichson, 1839) (図1)

は汎熱帯性で

(Blackwelder, 1943;

Cameron, 1930;

Herman, 2001;

Löbl & Smetana,

2004; Shibata *et al.*,

2013), 樹皮下に

生息する体長2

mmほどの小さい

ハネカクシである。

最近では衝突板

トラップやマレー

ゼトラップも活用

されて、各地で採集されるようになってきたので、

いままでの日本での記録を図示し (図2), 分布解

明の一助としたい。これにより分布の拡大は海流

によることが示唆される。横浜市の分布をご教示

頂いた大木裕氏をはじめ、採集に努力された全諸

氏に敬意を表する。

検視標本: 2exs., Yona, Okinawa Is., Okinawa Pref.,

7. VIII. 1964, T. Ito leg.; 5exs., Aha, Kunigami, Okinawa

Pref., 31. VII-10. VIII, 9-11. IX, 24. IX-6. X. 2009, K.

Sugino leg.; 7exs., Naze, Amami-ohshima Is., Kagoshima

Pref., 13. XI. 1960, T. Shibata leg.; 1ex., Nyuu, Maiduru,

Kyoto Pref., 23. VI-3. VII. 2006, T. Murao leg.; 2exs.,

Mt. Ooeyama, Fukuchiyama, Kyoto Pref., 11-15. 2012,

W. Ebita leg.; 1ex., Ninose, Sakyo-ku, Kyoto Pref., 9.

VIII. 2013, T. Ito leg.; 1ex., Nara Park, Nara Pref., 21.

III. 1990, S. Takahashi leg.; 1ex., Reigan-ji, Hirokawa-

cho, Wakayama Pref., 18. IX. 2011, I. Matoba leg. 5exs.,

Yokohama Univ., Hodogaya, Kanagawa Pref., 18, 25. V.

and 2. VI. 2009, Y. Ooki leg.

分布 (* 新記録): 小笠原諸島, 南硫黄島, 本州 (神

奈川県, 奈良県, 和歌山県 *, 京都府 *), 九州 (福岡

県), 屋久島, 沖永良部島, 奄美大島, 沖縄島 *(Shibata,

1974; Watanabe & Shibata, 1972; Naomi, 1996; 高橋,

1991; 久保・渡, 2007; 大木, 2012); 台湾, 汎熱帯地方。

引用文献

Blackwelder, R. E., 1943. Monograph of the West Indian beetles of the family Staphylinidae. United States National Museum Bulletin 182: i-viii + 1-658.



図1. 全形図 (京都市産)。

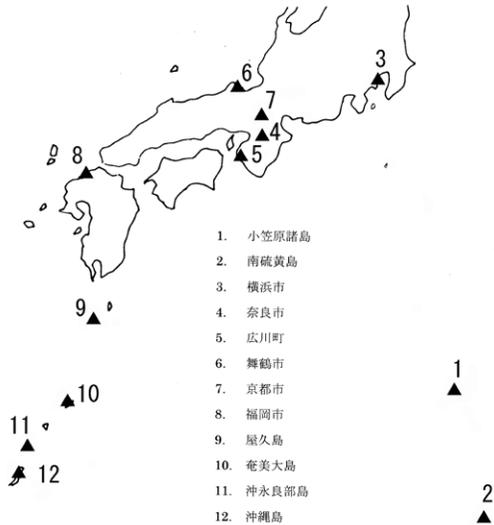


図2. 国内分布図。

Cameron, M., 1930. The fauna of British India, including Ceylon and Burma. I: 1-471.

Herman, L. H., 2001. Catalog of the Staphylinidae (Insecta: Coleoptera). 1758 to the end of the second millennium. III: i-v + 1067-1806.

久保浩一・渡 弘, 2007. 神奈川県初記録のハネカクシとゾウムシ. 神奈川虫報, (157): 44.

Löbl, I. & A. Smetana (eds.), 2004. Hydrophiloidea-Histeroidea-Staphylinioidea. Catalogue of Palaearctic Coleoptera, II. 942 pp. Apollo books, Denmark.

Naomi, S.-I., 1996. Taxonomic studies on the subfamily Osoriinae (Coleoptera, Staphylinidae) from Japan, VI. Natural History Research, 4: 49-55.

大木 裕, 2012. 横浜市北部周辺におけるハネカクシ類の記録その1. 神奈川虫報, (176): 49-56.

Shibata, Y., 1974. A list of genera and species new to Japan and new data on distribution of the Staphylinidae discovered from Japan since 1945 (Insecta: Coleoptera). Annual Bulletin of the Nichidai Sanko, 17: 1-43.

Shibata, Y., M. Maruyama, H. Hoshina, T. Kishimoto, S.-I. Naomi, S. Nomura, V. Puthz, T. Shimada, Y. Watanabe & S. Yamamoto, 2013. Catalogue of Japanese Staphylinidae (Insecta: Coleoptera). Bulletin of the Kyushu University Museum, (11): 69-218.

高橋 徹, 1991. 奈良公園の甲虫: 京都府南部の甲虫相との比較. 関西甲虫談話会資料 (1): 1-46.

Watanabe, Y. & Y. Shibata, 1972. The staphylinid-beetles of Yakushima Island, Japan, with descriptions of a new genus and new species. Journal of Agricultural Science of the Tokyo University of Agriculture, 17: 59-72.

(伊藤建夫 614-8371 八幡市男山雄徳 7, E12-102)

【短報】長崎県のナガマルチビゴゲンゴロウの記録

ナガマルチビゲンゴロウ *Leiodytes kyushuensis* (Nakane, 1990) は、本州、九州、奄美大島に分布する小型ゲンゴロウの一種である(記野・長谷川, 2001; 森・北山, 2002)。溜池などの止水域の水際に生息し、主に枯死した植物が堆積したような浅い場所で見つかるが、枯死した植物が全くない石の間隙から見つかる例もある(森, 2013)。今回、長崎県では初記録と思われる本種を確認したので報告する。

19 exs., 長崎県長崎市相川町, 5. V. 2012, 深川採集, 森正人・深川保管, 森正人一部同定。

10 exs., 長崎県長崎市野母樺島町, 4. IV. 2013, 深川採集, 森正人・深川保管, 森正人一部同定。(図1)

5 exs., 長崎県佐世保市吉井町, 22. IX. 2013, 深川採集・同定・保管。

2 exs., 長崎県北松浦郡佐々町口石免(図2), 22. II. 2014, 深川採集, 深川保管・同定。15 exs. 同, 2. III. 2014, 深川採集, 森正人・今坂・深川保管, 森正人一部同定。

5 exs., 長崎県諫早市森山町唐比西, 16. III. 2014, 深川採集・同定・保管。

24 exs., 長崎県平戸市東中山町, 5. IV. 2014, 深川採集・同定・保管。

採集場所は、溜池や休耕田の水際に植物が枯死して堆積している場所やミゾソバが増水等により水中へ没しているようなところである。そこへ立ち入った際に、足下が10 cm程ゆっくりと沈み、



図2. 晩冬の生息地。

水が浸み出てくると、その足下の水溜まりでチビゲンゴロウ *Hydroglyphus japonicus* (Sharp, 1873) に混ざって遊泳している姿が確認できた。採集した時期が晩冬でもあることから、生息場所もしくはその近隣で越冬している可能性がある。上述のような場所は、人為的な影響を受けやすく、小規模な工事でも容易に生息場所が消失する可能性があり、これまで確認されていなかったことを考えれば、本県では局所的に分布していると思われる。また、長崎県内には、本種に類似するホソマルチビゲンゴロウ *L. miyamotoi* (Nakane, 1990) の生息も確認されていることから(松尾・下條, 2014)、県内の両者の生息状況を早急に把握しておく必要がある。

末筆ながら、本種の同定をお願いし生態等についてもご教示いただいた森正人氏、本種の調査について多大なご助力を賜った松尾照男氏と、長崎市環境政策課の諸氏にはこの場をお借りし、厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 記野直人・長谷川 洋, 2001. 日本産クロマメゲンゴロウ類の分布. 甲虫ニュース, (134): 21-25.
 松尾照男・下条清隆・西海学園高等学校科学同好会, 2014. 上五島宇久島の甲虫類採集記録. こがねむし, (79): 5-27. 長崎昆虫研究会.
 森 正人, 2013. 微小水生甲虫の生息環境について - ミジンダマガムシとナガマルチビゲンゴロウの例 -. さやばねニューシリーズ, (9): 33-36.
 森 正人・北山 昭, 2002. 改訂版 図説日本のゲンゴロウ. 231pp. 文一総合出版。

(深川元太郎 859-2212 長崎市畝刈町 1613-262)
 (今坂正一 830-0037 久留米市諫訪野町 1736-3)

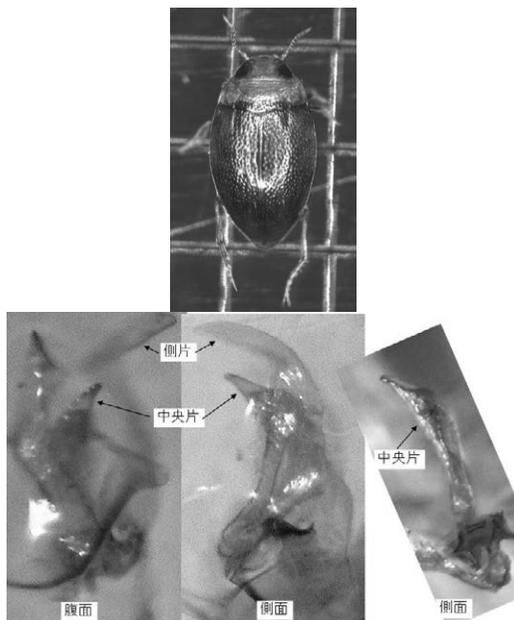


図1. 採集個体と♂交尾器。

【短報】 東北地方におけるイノウエホソカタムシの記録

イノウエホソカタムシ *Antibothrus morimotoi* Sasaji, 1997 は福井県南条町上牧谷と三重県平倉で採集された3個体の標本にもとづき記載された体長2.5 mm程の小型の甲虫である。本種の捕獲記録は少なく、しかも、その後の追加記録は奈良県や京都府、兵庫県など原産地の近隣府県に限られていた(青木, 2009)。しかし、最近、これらの既産地から南に遠く離れた屋久島からの記録が公表された(青木, 2012)が、筆者は、これとは逆に北遠の岩手県で多数の個体を捕獲しているので報告する。

岩手県滝沢村滝沢字榎ノ木沢 (39°46'N, 141°9'E), 2 exs., Apr. 24 – May 2, 2008; 19 exs., Apr. 21 – May 27, 2011; 66 exs., Apr. 18 – May 23, 2014. いずれも、エタノールを誘引源とする衝突板式トラップ (Flight Interception Trap) による捕獲。

採集地は、盛岡市郊外にひろがる低標高の里山林で、岩手大学附属滝沢演習林として管理されている。この里山林は、150 haにおよぶアカマツやコナラの二次林と、118 haのスギやアカマツ、カラマツなどの人工林から構成されている(岩手大学, 2007)。これらのさまざまな植生下に、2008年は6個、2011年は5個のトラップを設置して甲虫相調査を行った中で、本種の生息を確認した。2008年はコナラ林とアカマツ林でそれぞれ1個体ずつ捕獲し、2011年はシラカバ林で10個体と、前記とは別の2箇所のコナラ林で、それぞれ、7個体と2個体を捕獲した。2014年は追加捕獲をめざして、前記のシラカバ林に1個のトラップを設置したところ、一挙に66個体も捕獲された。なお、2011年には、市街地に近接する盛岡市下厨川と中山間に位置する雫石町御明神においても、それぞれ5個のトラップを用いて同様の調査を行ったが、本種の捕獲はなかった。

多数の個体が採れたシラカバ林は、胸高に達する密生したササ原にシラカバが疎生し



図1. イノウエホソカタムシ (上: 背面, 下: 腹面)。

ている状況であり、7個体採れたコナラ林では、他の場所とは異なり、林縁の明るい場所に設置したトラップで捕獲された。本種は、樹冠の閉鎖した林内よりも、解放的で明るい環境で捕獲され易いのかも知れない。また、トラップは1.3 mの高さに設置し、4月上・中旬から9月下旬あるいは12月上旬まで連続して調査を行ったが、いずれの年も、捕獲されたのは春の短期間に限られていた。本種が属するBothriderinae 亜科の幼虫はキクイムシやシバンムシ等の穿孔性甲虫の幼虫や蛹に外部寄生者すると考えられており(Lawrence and Britton, 1994)、成虫もまた、その円筒形の体型から、坑道内での生活を送っていると推察される。本種の採集記録が少ないのは、成虫が坑道外で活動する期間が非常に限られているからなのかも知れない。

穿孔性甲虫やその捕食者は、衰弱木から揮散する匂いに誘引された後、最後は樹幹の色や形を頼りに定位するといわれている。トラップを用いて本種を採集した井上重紀氏は、誘引源としてナラ材のエタノール滲出液を用いている(青木, 2009)が、今回は、市販の95%エタノールで捕獲できた。また、2008年の捕獲は、井上氏が使用したのと同じサンケイ化学社製の黒色の昆虫誘引器によるものであったが、2011年と2014年は、乳白色の半透明クリアファイルとナイロン袋を加工して作ったトラップで捕獲した。このようなトラップでも多数の個体が捕獲できたことから、必ずしもナラ材の滲出液や黒色のトラップにこだわる必要はないと考えられる。

末筆ながら、調査を許諾いただいた岩手大学農学部附属寒冷フィールドサイエンス教育研究センターにお礼申し上げる。

引用文献

- 青木淳一, 2009. ホソカタムシの魅惑. 194 pp. 東海大学出版会, 秦野.
 青木淳一, 2012. 日本産ホソカタムシ類図説. 93 pp. 六本脚, 東京.
 岩手大学農学部附属寒冷フィールドサイエンス教育研究センター, 2007. 演習林概要. 13pp. 岩手大学, 盛岡. (<http://news7a1.atm.iwate-u.ac.jp/~fsciu/ensyuringaiyou.pdf>)
 Lawrence, J. F. and Britton, E. B., 1994. Australian beetles. 192 pp. Melbourne Univ. Press, Victoria.
 Sasaji, H., 1997. A new species of the genus *Antibothrus* (Coleoptera, Bothrideridae) from Japan, with notes on the Japanese Bothriderinae. *Esakia*, (37): 111–116.

(磯野昌弘 020-0123 盛岡市下厨川字鍋屋敷 92-25 森林総合研究所東北支所)

ていると考えられる。

謝辞

末筆ながら、問い合わせに応じてくださった新井浩二、堀繁久の両氏、貴重なデータを提供してくださった幸形聡氏、ならびに草稿を読んでくださりご指摘をくださった小島弘昭、森本桂、野村周平の3博士に心よりお礼申し上げる。

引用文献

- Anonymous, 1917. February 3rd, 1916. Proceedings, Hawaiian Entomological Society, 3(4): 266–268.
- Beardsley, J. W., 1966. Insects and other terrestrial Arthropods from the Leeward Hawaiian Islands. Proceedings, Hawaiian Entomological Society, 19(2): 157–185.
- Blatchley, W. S., 1922. Notes on the Rhynchophora of eastern north America, with characterizations of new genera and descriptions of new species. Journal of the New York Entomological Society, 30(3): 113–127.
- Blatchley, W. S. and C. W. Leng, 1916. Rhynchophora or weevils of north eastern America. 682pp., Indianapolis, The Nature Publishing Company.
- Caribbean Insect & Plant Database (<http://insects.oeb.harvard.edu/caribbean/>). カリブの昆虫と植物のデータベース, ハーバート大学. 2014年3月閲覧
- Champion, G. C., 1909. Rhynchophora. Biologia Centrali-Americana IV. Pt. 7, 1–177pp., Smithsonian Institution.
- Chūjō, M. and E. Voss, 1960. Neue Curculioniden-Subfamilie, -Gattungen und -Arten von Japan (Coleoptera, Curculionidae). Memoirs of the Faculty of Liberal Arts & Education, Kagawa University (Part II), (94): 1–17.
- Fosberg, F.R., 1962. A brief survey of the cays of Arrecife Alacran, a Mexican atoll. The Pacific science board, National Academy of Sciences (National Research Council), Atoll research bulletin, 93: 1–25.
- Konishi, M., 1962. Taxonomic studies on the Cossoninae of Japan (Coleoptera : Curculionidae), Part 1. Insecta Matsumurana, 25(1): 1–17.
- 平野幸彦・上田康之・渡 弘・吉田篤人, 1993. 伊豆新島産甲虫類採集報告. 神奈川虫報, (104): 1–12.
- Hlaváč, P. and N. Maughan, 2013. Cossoninae. 217–229pp., Löbl, I.

- and A. Smetana eds., Catalogue of Palaearctic Coleoptera Vol. 8, Brill
- Hong, K. -J. Park, S. and K. Han, 2012. Arthropoda: Insecta: Coleoptera: Curculionidae: Curculioninae, Cossininae, Mesoptiliinae-Weevils II. Insect Fauna of Korea, 12(7): 1–179.
- Horn, G. H., 1873. Contribution to a knowledge of the Curculionidae of the United States. Proceedings of the American Philosophical Society, 13(91): 407–469.
- 小島弘昭, 2012. 山形県飛鳥のゾウムシ上科甲虫相. さやばねニューシリーズ, (6): 31–34.
- 楠井善久, 1990. 奥尻島の昆虫 (III) - オトシブミ科・ゾウムシ科・オサゾウムシ科 -. Jezoensis, 17: 48–53.
- 森本 桂, 1985. キクイゾウムシ類概説 : III. キクイゾウムシ亜科 (2). 家屋害虫, (23,24), 19–28.
- 森本 桂, 2001. 南鳥島の昆虫採集記 . 北九州の昆虫, 48(2): 71–75, 2 pls.
- Morimoto, K. and S. Miyakawa, 1985. Weevil fauna of the Izu Islands, Japan (Coleoptera). Mushi, 50(3): 19–85.
- 日本林業技術協会, 2003. 添付資料 : 2. 生物種リスト (小笠原固有種・昆虫リスト). 46–101pp, 平成 14 年度小笠原地域自然再生推進調査報告書 .
- Peck, S. B., 2006. Superfamily Curculionoidea. 253–280pp., The Beetles of the Galápagos Islands, Ecuador: Evolution, Ecology, and Diversity (Insecta: Coleoptera). NRC Research Press.
- Perkins, R. C. L., 1900. Coleoptera Rhynchophora, Proterhinidae, Heteromera and Cioidae. Fauna Hawaiiensis Vol. II, Part III, Coleoptera I, 117–270pp.
- Perkins, R. C. L., 1926. Coleoptera, weevils. Insects of Hawaii, Johnston Island and Wake Island. Bernice P. Bishop Museum Bulletin, 31: 53–66.
- Ivie, M. A., K. A. Marske, I. A. Foley and L. L. Ivie, 2008. Appendix 2. Species lists of the beetles, non-beetles hexapods and non-hexapod invertebrates of Montserrat. 237–311pp., A Biodiversity Assessment of the Centre Hills, Montserrat, Durrell Conservation Monograph No.1, Durrell Wildlife Conservation Trust.
- Staub, F., 1970. Geography and ecology of Tromelin Island. Atoll Research Bulletin, (136): 197–209.
- Zimmermann, E. C., 1940. Synopsis of the genera of Hawaiian Cossoninae with notes on their origin and distribution (Coleoptera, Curculionidae). Occasional papers of Bernice P. Bishop Museum, 15(25): 271–293.

(2014年4月9日受領, 2014年6月3日受理)

【短報】オビモンコミズギワゴミムシの広島県からの記録

オビモンコミズギワゴミムシ *Tachyura ceylanica* (Nietner, 1858) は, Ceylon を基準産地として記載された, 体長 1.8 ~ 2.0 mm 程度の小型のコミズギワゴミムシである. 我が国からは, Tanaka(1959) により神奈川県平塚市で採集された標本を基に報告されたのが最初である. 中根(1978) は, 海外の分布域としてセイロン(現・スリランカ), インド, ビルマ(ミャンマー), マレイ(マレーシア), フィリピン, セレベス(スラウェシ), 南支(中国南部) を挙げている. 国内の記録は少なく, 前述の神奈川県平塚市の他に, 石垣島(Habu, 1975), 東京都(和泉, 1990), 神奈川県内数ヶ所(平野, 2004) の

記録があるにすぎない.

昨年, 筆者は, 広島県で本種を採集しているののでここに報告する.

3exs. (図1), 広島県竹原市吉名, 28. IX. 2013.

瀬戸内海に面する塩湿地での灯火採集で得られたものである. その後, 数回にわたり地表の探索, 灯火採集を試みたが追加することは出来なかった. 本種の国内での報告例が少ないのは, 同定自体が難しいことのほか, 埋め立て, 護岸工事, 水質悪化等によってその生息環境の減少によるものと思われる. これまでの採集地から, 本種が河口や塩湿地などに依存していることが示唆されるが, 和泉(1990)の記録は, 森田誠司氏によると, 東京都大田区内の落葉下から採集された模様で, 海浜

性の種とみなすには否定的な見方もあるため、今後も調査を続行していきたい。

なお、今回、森田誠司氏により、つくばの農業環境技術研究所に所蔵されている標本（田中和夫博士採集の平塚産）と直接比較されたうえ、さらに、Andrewes (1925) の再記載ともよく一致することが確認された。

末筆ながら、同定、文献のコピー、ならびに原稿の校閲の労をとって頂いた森田誠司氏に厚くお礼申し上げる。

引用文献

- Andrewes, H. E., 1925. A revision of the Oriental species of the genus *Tachys*. Annli. Mus. civ. Stor. nat. Genova, 51: 327-502.
- Habu, A., 1975. Carabid beetles Mr. A. Sugimoto taken in Ishigaki Is., Ryukyus, by a black-light trap (Coleoptera, Carabidae). Ent. Rev. Japan, Osaka, 28: 69-84.
- 平野幸彦, 2004. コウチュウ目 Coleoptera. 神奈川県昆虫誌II :335-835.
- 和泉敦夫, 1990. 東京都のゴミムシ3種の記録. 甲虫ニュース, (90) : 6.
- 中根猛彦, 1978. 日本の甲虫(48) ごみむし科 2. 昆虫と自然, 13(4) : 14-18.
- Nietner, J., 1858. Descriptions of new Ceylon Coleoptera. Ann. Mag. nat. Hist., (3)2: 418-431.
- Tanaka, K., 1959. Notes on the Carabidae from Japan and Formosa (Coleoptera). Kontyû, 27: 218-220.

(大塚健之 732-0062 広島市東区牛田早稲田 1-11-2)

【短報】イシガキカタキバゴミムシ長崎県の記録

イシガキカタキバゴミムシ *Badister (Baudia) ishigakiensis* Habu, 1975 は、石垣島を基準産地として記載され、トカラ列島島島が北限となっている種である (Habu, 1975; Morita, 1994)。今回、九州本土の長崎県で採集し、本種生息地の北限となると思われるのでここに記録しておく。

1♀, 長崎県長崎市野母崎樺島町, 22. IX. 2012, 深川採集, 森田氏同定・保管。(図1)



図1. オビモンコムズギワゴミムシ。

採集地は、昭和49年に造られた地下ダムの地表にできた水辺で、水田の畦道に似た環境となっている。地下ダムは、地中に遮水壁をつくって、地下水の流れをせき止めることにより、地下水をためる構造であり、本地が日本で最初の場所である(図2)。



図1. 採集個体。

土壌は粘土質で、ヨモギ、ウマゴヤシ類などの植物が疎生している。年に1, 2回管理のため草刈が行われており、増水時には水没することもあるためか、植物の背丈が低い状態で維持され、水分を多く含んだ土壌となっている。

採集日は、日中から継続して雨となっていたため、夜間の採集時には泥がぬかるむ状態となっていた。また、本種以外にホソツヤナガゴミムシ *Abacetes leucotelus* Bates, 1873 が多数確認され、ライトで照らしながら手で直接採集していたが、本種は、これら採集個体の中に紛れ込んでいたものである。

長崎は、1571年から国内唯一の開港地として知られた場所であり、モンキタマムシ *Ptosima chiinensis* Marseul, 1867 やキマダラカメムシ *Erthesina fullo* (Thunberg, 1783) など長崎以外から持ち込まれたと思われる種が知られている。本種もその可能性を否定できないものの、少なくとも本種が生息できる環境が長崎に存在していることは確かである。なお、2013年は、3月から毎月同地で採集を行っているが、個体を追加するに至って



図2. 生息地の環境。

いない。本地でも生息する個体数はあまり多くないようである。

末筆ながら、本種についてのご教示を賜った今坂正一氏と森田誠司氏にお礼申し上げる。

引用文献

- Habu, A., 1975. Carabid beetles Mr. A. Sugimoto taken in Ishigaki Is., Ryukyus, by a black-light trap (Col. Cara). Entomological Review of Japan, 28 (1/2): 69-84.
- Satō, M., Morita, S., Ohbayashi, N., Kimura, M., Sakai, M., Notsu, Y., Kaneno, S. and Hori, Y., 1994. The insects fauna of the Tokara islands of the Ryukyu archipelago. WWF Japan science report, 2 (2): 251-309.

(深川元太郎 859-2212 長崎市畝刈町 1613-262)

【短報】ハネカクシ科3種の採集記録

柴田(1985)および柴田ほか(2013)を参考に、ハネカクシ科の1追加記録, 2新分布記録を報告する。

1. オキナワデオキノコムシ *Scaphidium okinawaense* Hoshina & Morimoto

1ex., 沖縄県沖縄島名護市名護岳, 27. III ~ 1. IV. 2007, 筆者採集。

名護岳登山口付近林内の比較的平らな所に, 3基のFITと乾燥した鳩, 犬の糞を27. III ~ 1. IV. に設置したところ, 多くの糞虫とともに本種が入っていた。翌年も, 5月11-17日に同じ場所に10基のFITを同じように掛けたが追加できなかった。図鑑類には掲載されていない種であるが, 保科(2006)により同定できた。本種は沖縄島特産で3頭目の記録になる。

2. オオハネカクシ *Creophilus maxillosus* Linnaeus

1ex., 鹿児島県徳之島天城町轟, 21. VI. 2006, 筆者採集。



図1-3. ハネカクシ科3種。1, 名護岳産オキナワデオキノコムシ; 2, 徳之島産オオハネカクシ; 3, 屋久島産キンボシマルズオオハネカクシ。

分布: 北海道, 本州, 伊豆八丈島, 四国, 九州, 屋久島, 奄美大島, 徳之島(新分布), 沖縄島, 伊平屋島, 石垣島, 西表島; シベリア, 台湾, 韓国, 北朝鮮, 中国, インド, ハワイ, ヨーロッパ, 北アフリカ, アメリカ。

道路沿いの蛇の死体にきていた。

3. キンボシマルズオオハネカクシ *Oocyptus weisei* Harold

1ex., 鹿児島県屋久島平内, 3. IV. 2010, 向山敬延採集.; 1ex., 屋久島原, 11. VII. 2013, 同採集。

分布: 北海道, 本州, 四国, 九州, 対馬, 屋久島(新分布); 韓国, 北朝鮮, 中国。

この2個体とも奈良市春日山産と比べて, 上翅の金色紋は小さく, 黒色の胸背には金色毛がない。

いつも標本を提供してくださる向山敬延氏, 文献でお世話になった今坂正一氏と杉野廣一氏にお礼を申し上げる。

引用文献

- 保科英人, 2006. 琉球産鞘翅目ハネカクシ科デオキノコムシ属概説. 甲虫ニュース, (155): 11-14.
- 柴田泰利, 1985. ハネカクシ亜科. 上野俊一ほか編著, 原色日本甲虫図鑑 II: 302-304, pl. 53. 保育社。
- 柴田泰利ほか, 2013. 日本産ハネカクシ科総目録(甲虫綱: 甲虫目), 九州大学総合研究博物館研究報告, 11: 124, 171-172.

(田中 稔 663-800 西宮市一里山町 19-18)

【短報】ナカネアメイロカミキリ隠岐諸島の記録

島根県隠岐諸島から記録のあるカミキリムシ科甲虫は, 林・門脇(2012)によれば150種にも及ぶ。この種数から, 隠岐は本州属島のカミキリムシ科としては非常に高い種多様を示すとともに, 精度高い調査が行われてきたことを伺い知ることができる。2013年夏に, 隠岐島前で養老孟司博士が採集されてきたカミキリムシの標本を調べたところ, 過去に記録のないナカネアメイ

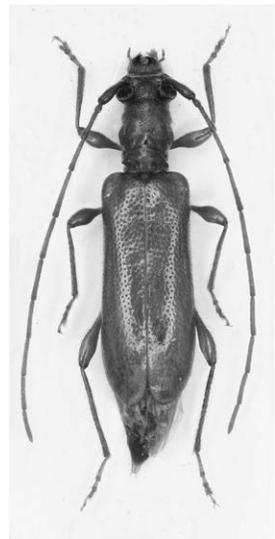


図1. 隠岐島前で採集されたナカネアメイロカミキリ(♀)。

ロカミキリ *Obrium nakanei* Ohbayashi, 1959 を確認することができた。隠岐 151 種目のカミキリムシの貴重な記録として以下に報告する。

貴重な標本を提供された養老孟司博士ならびに隠岐諸島の甲虫類に関する文献をご教示された林成多博士にお礼申し上げる。

検視標本：1 ♀，島根県隠岐島前焼火山，2013 年 7 月 18 日，養老孟司採集（新里達也保管）。

本種は日本固有で，北海道，奥尻島，本州，四国および九州に分布する（新里，2007）。奥尻島が唯一の島嶼の産地として知られていたが，隠岐はそれに続く 2 番目の島嶼産地となる。本種の幼虫はハリギリ（ウコギ科）の生木樹皮内に穿孔するため，成虫はその樹幹部で活動する個体が見つかることが多いが，ときに花や灯火に飛来することもある。本個体は叩き網により採集されたとのことだが，一般に高所生活者でかつ特異な生態の本種が，地表付近のランダムな採集で得られたという事例は珍しい。

引用文献

- 林 成多・門脇久志，2012. 隠岐諸島の甲虫類目録（1930–2011）. ホシザキグリーン財団研究報告特別号，(5)：1–120.
- 新里達也，2007. カミキリ亜科（図解検索と種の解説）. 大林延夫・新里達也（編），日本産カミキリムシ，pp. 252–281，424–512. 東海大学出版会，秦野。

（新里達也 株式会社環境指標生物）

【短報】先島諸島におけるヒラナガゴミムシ属2種の採集記録

これまで先島諸島において，ヒラナガゴミムシ属 *Hexagonia* は，チャイロヒラナガゴミムシ *H. sauteri* Dupuis, 1912，ヒトツメヒラナガゴミムシ *H. cyclops* Matsumura, 1910，ワタナベヒラナガゴミムシ *H. watanabei* Morita & Toyoda, 2002 の3種が記録されている。それらのうち，チャイロヒラナガゴミムシおよびワタナベヒラナガゴミムシについて，これまで分布の記録がない島から採集しているので，ここに報告する。なお，採集者はすべて野一色麻人である。

1. チャイロヒラナガゴミムシ *Hexagonia sauteri* Dupuis, 1912

5exs., 宮古島平良, 18. XI. 2012.

本種は沖縄本島，石垣島，西表島，与那国島に分布し，国外では台湾に分布する（沖縄防衛局，2012; 屋富祖ほか，2002）。今回，宮古島中央部に



図1. ワタナベヒラナガゴミムシを採集した与那国島の湿地。

位置する二次林において，林縁に生育していた草丈1～2m程度のアダンの葉鞘間から本種を採集した。

2. ワタナベヒラナガゴミムシ *Hexagonia watanabei* Morita & Toyoda, 2002

2exs., 与那国島久座（くだ），21. XI. 2012.

本種は沖縄本島，石垣島，西表島に分布する。成虫は湿地に生育するスゲ属の一種あるいは山地のツルアダンの葉鞘間に生息する（Morita & Toyoda, 2002）。今回，与那国島中央部に位置する河川中流の小規模な湿地（図1）にて本種を確認した。湿地にはスゲ属の一種，タチアワユキセンダングサなどの小型湿性草本が優占していた。本種は草丈50～80cm程度のスゲ属の一種の葉鞘間から採集した。

末筆ながら，ワタナベヒラナガゴミムシに関する文献をご惠贈下さった森田誠司氏に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- Morita, S. & Toyoda, K., 2002. A new *Hexagonia* (Coleoptera, Carabidae) from Southwest Japan. Special Bulletin of the Japanese Society of Coleopterology, No. 5 Nabesania: 175–180.
- 沖縄防衛局，2012. 普天間飛行場代替施設建設事業に係る環境影響評価書資料編「第6章 6.17 陸域動物」：資6–17–69. URL <http://www.mod.go.jp/rdb/okinawa/07oshirase/chotatsu/hyoukasyo/174.pdf> (2014年4月5日アクセス)
- 屋富祖昌子・金城政勝・林 正美・小濱維雄・佐々木健志・木村正明・河村 太（編）東 清二（監修），2002. 琉球列島産昆虫目録増補改訂版. 沖縄生物学会，：165.

（野一色麻人 522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500 滋賀県立大学大学院環境科学研究科）



塚本珪一・稲垣政志・
河原正和・森 正人著
「日本のオオセンチコガネ」
月刊むし・昆虫図説シリーズ3. 112 ページ
定価 6,912 円 (税込)

オオセンチコガネはとても美しい。間違いなく、日本産甲虫の美麗種トップ 10 に入れてよいと思う。しかも身近な虫である。

もう 40 年近く昔のことになる。友人の標本箱でオオセンチを初めて見た私はその美しさに強く打たれ、週末を待ちわびて小海線沿線の牧場に一人採集に出掛けた。あいにくの梅雨空の下、牛糞起こしは気分の良いものではなかったが、何 10 個目かの糞塊の下から現れた赤紫色に輝くその姿を目にして、冷え切った身体が熱く火照った思い出がある。

実は当時、私の虫友関係は小幡・五味・堀口という強面の糞虫屋諸兄に完全包围されたような状態にあった。それだからこの小海線採集行の延長線上に、憧れのルリセンチとミドリセンチの採集行も予定されていたはずなのだが、なぜかその機会は訪れることはなかった。やがてライフワークとなるカミキリムシに強く傾倒するにつれて、糞虫に対する熱意も失せていったのである。

「日本のオオセンチコガネ」を手にしたとき、まず思い浮かんだのが、そんな自分の青くさい時代の出来事であった。あの頃は、どんな虫に対しても、無条件に強く興味を惹かれたものである。

虫屋はふつう自分の専門領域(分類群)を持っている。資金や寿命などを少し試算すればわかることだが、虫をやるには人生は短すぎるし、研究でも収集でも一個人の裁量に限界はある。これが専門を持つ主な理由かもしれないが、ある意味で諦めの形にすぎないのである。実際に、暇も財力もあるコレクターは美しい昆虫を悉く集めてしまう。ドイツ箱ウン千箱なんていう規模の人である。何が楽しいのかとイヤミの一つも口にしたくなるが、内心では羨ましくてしょうがない。

そうした目線で改めてオオセンチを眺めてみた。もちろん、私はコレクションを持っていないから、本書を開いただけである。

オオセンチは北海道から屋久島まで広く分布する。自分の拙い経験から分布はもっと局所的だと思いついていたが、自治体単位で記録がないのは香川、佐賀および沖縄の 3 県だけという。まさに日本を代表する甲虫である。著者らは異常な執念のもと、この虫の色彩変異を都道府県単位で図版に並べ尽くした。かねてより生物図鑑は本来の目的を超えて、美術書の世界まで昇華するだろうと期待していたが、ご覧のように本書は表紙からして美術書そのものである。

ところで、こうしたオオセンチの色彩変異は、生物地理学の視点で捉えた地域集団とは、どうやら異なるものらしい。日本列島の隅々まで広く優占する赤紫色の集団の中に、青色型や緑色型が不連続に現れてくる。彼らは広域に分布する色彩多形な遺伝子集団から、たとえば環境圧のようなストレスにより選択的に発現したものだろう。それには餌資源を依存する大型獣の移動、あるいは放牧などの人間活動が影響してきたように思われる。素人考えなので、間違っていたらお許し願いたい。図版に目を落とし東西に流していくと、変異の安定性と不連続性に不思議な思いが湧いてくる。

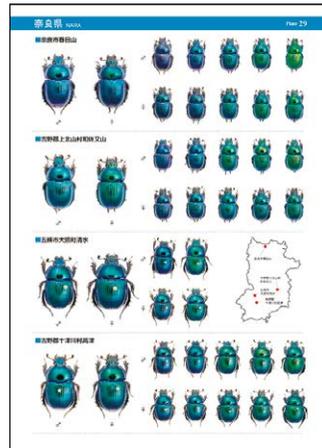
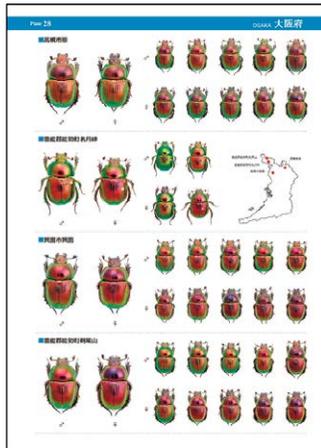
あとがきの中で、本書の出版が虫屋の収集欲を刺激するかむしろ萎えさせるかと、著者らは楽しい予想を投げかけてくる。決して萎えたわけではないが、私などは昔の夢を叶えてくれた喜びもさることながら、もうオオセンチだけはおなか一杯である。完璧な図鑑はその一冊で収集欲も満たしてくれるのだ。

これもあとがきの中の一節。多くの虫の命を奪った昆虫図鑑に鎮魂の詩を添えたいというくだりがある。この言葉は虫屋的にはグサリと胸に突き刺さる。しかし、私が事実そうであったように、本書がもたらす充足感は無益な殺生に抑止力があるようだから、こうした著者らの祈りも必ずや読者の心に届くに違いない。

本書は、むし社 HP (<http://www.mushi-sha.com/>) か、電話 (03-3383-1461・1462)・Fax (03-3383-1417) により注文できる。

(新里達也 (株)環境指標生物)

オオセンチコガネの魅力のすべてがこの1冊に!



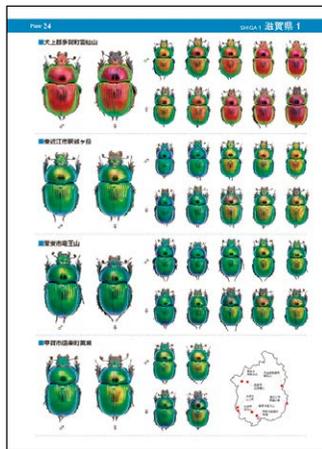
月刊むし・昆虫図説シリーズ 3

日本のオオセンチコガネ

著者：塚本珪一・稲垣政志・河原正和・森 正人
A4判, 上製本 112頁 (48カラー頁)

定価 6,912 円 (税込, 送料サービス)

- カラープレートには記録のある全44都道府県の標本を多数掲載。
- 県ごとの珍品度を☆の数で表示。
- 特別色彩変異と大小ギネスも収録。
- 海外のオオセンチコガネ、アジアのセンチコガネ類も紹介。
- 解説には、分布・研究史・分類・生態・採集法などを記述。
- オオセンチコガネを愛する人たちを紹介。
- 楽しいコラムや標本データ集も収録。



お申し込み方法 ご注文は、むし社販売用ホームページ (<http://www.mushi-sha.com/>), または電話 (03-3383-1461・03-3383-1462), FAX (03-3383-1417) にて受け付けております。

※お支払いは「代金引換(ヤマト運輸コレクト)」または、前払いにて郵便振替(専用振替用紙をお送りいたします)・銀行振込(ゆうちょ・ジャパンネット)となります。

むし社 〒164-0001 東京都中野区中野 2-23-1-209 Tel. 03-3383-1461・1462



Bousquet, Y., Bouchard, P., Davies, A. E., Sikes, D. S., 2013. Checklist of Beetles (Coleoptera) of Canada and Alaska. Second Edition. Pensoft Series Faunistica, No 109. Pensoft Publishers, Sofia-Moscow. 402 pp.

カナダ・アラスカ産コウチュウ目の既知分類群すべてを網羅したチェックリストである。本書の22年前に出版された第1版(Bousquet, 1991)では7,436種・亜種が掲載されたが、今回、その後に行われた高次分類体系の変更や、地域ファウナに関する新知見を盛り込んで大幅な増補・改訂が行われ、801件増の8,237種・亜種が掲載された。旧北区のファウナとの関連性が高い当該地域の甲虫相を概観するのに大変役立つ一冊である。

チェックリストの基本構成は第1版と同様だが、科階級群タクサの分類体系はBouchard *et al.* (2011)に従っており、上科と科、亜科は系統関係に基づいて配列され、上族と族、亜族はアルファベット順に配列されている。そして、属階級群タクサと種階級群タクサ、無効シノニムがアルファベット順に配列されている。特段の事情がない限りシノニムは掲載されていない。チェックリスト自体は非常にシンプルな構成だが、属階級群以上のタクサについて種同定に有用な検索表がある場合は、その学名の下に文献情報が記されているので、大いに参考になる。また、全北区に分布する種・亜種名にはアステリクス(*)を、移入種にはダガー(†)を付すことによって、一目で北米産種と区別できるように工夫されている。各種・亜種の分布情報は、アメリカ合衆国アラスカ州とカナダ10州、3準州の計14地域に区分した上で、それらの略称(2文字のアルファベット)を西から東、北から南の順に記すことで表されていて大変見やすく、地域レベルでの分布記録の欠落はハイフン(—)で表されていて一目瞭然である。ただし、分布情報は全て行政区分の略称なので、私のようにカナダの地理に疎い利用者は、まず地図で各区分の位置関係を確認した上で、それらの略称を頭に入れておく必要があるだろう。一度慣れさえすれば、各種・亜種の分布域が簡単にイメージできるようになるので、これも第1版から引き継いだ著者らの工夫の賜物なのだと感じている。

本書では、チェックリストの前に種数(実際には種階級群タクサ数)の一覧表があり、各科についてアラスカ州とカナダの州・準州毎の種数やカナダ・アラスカにおける総種数、全北区に分布する種数、侵入種数(定着が確認された種のみ)を把握できるようになっている。また、本表には、各列の最後に全科の総種数と全体に占めるその割合、第1版での総種数と第2版との差が明示しており、非常に分かりやすい。分類群別に見ると、最も多いのはやはりハネカクシ科で1,682種、次いでオサムシ科989種、ゾウムシ科(キクイ・ナガキクムシ科を含む)823種の順となっている。ただし、ゾウムシ科については、当該地域の植生と気候帯の単調さを考慮したとしても、広大な地域にこの数は余りに少ないと言わざるを得ず、まだまだ研究の余地が多く残されていると思われる。それから、地域別に見ると、研究者密度が最も高いオンタリオ州が4,513種(全体の総種数の54.8%)で1位となっているが、これは調査精度の影響が大きいのかかもしれない。一方、北極圏のヌナヴット準州は123種(1.5%)で断トツの最下位となっているが、例え面積が広大でもここでは本当に虫が少ないに違いない。他に目立つのは侵入種が628種で実に全体の7.6%を占めており、1991年時点の469種から159種も増えたことである。毎年7種以上が侵入・定着している計算となり、この世界的問題の深刻さを再認識させられた。例えばゾウムシ科では、823種中19種が全北区に分布する一方、106種が侵入種であり、チビヒョウタンゾウムシやクリイロクチブトゾウムシなど、中には北東アジア原産のものが散見される。

本書を眺めていると、どうしても同じフォーマットで北米全体の甲虫リストが欲しくなるが、無い物ねだりなのでどうしようもない。一応1996年に出版された“Nomina Insecta Nearctica. A Check List of the Insects of North America. Volume 1: Coleoptera, Strepsiptera”(http://www.nearctica.com/nomina/main.htm)があるものの、本書にはかなり問題点が多いし、そもそも分布情報が全く含まれていないので、残念ながら、現時点では地域ファウナが各分類群のリストを個別にチェックしていく他ない。

(吉武 啓 独立行政法人農業環境技術研究所)

お知らせ・会務報告

日本甲虫学会第5回大会のご案内

日本甲虫学会第5回大会を次の要領で開催することになりました。会員の皆様には奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。次号では、さらに詳細についてご案内できる予定です。

大会概要

- 会場： 倉敷市立自然史博物館・倉敷市立美術館（岡山県倉敷市中央2-6-1）
 会期： 2014年11月22日（土）～23日（日）
 主催： 日本甲虫学会 主管 日本甲虫学会第5回大会事務局（倉敷市立自然史博物館内）
 共催： 倉敷市教育委員会・倉敷市立自然史博物館
 後援： 倉敷市立自然史博物館友の会・倉敷昆虫同好会・岡山昆虫談話会

大会日程

第1日：11月22日（土）

大会受付開始	09：30～
評議員会	10：00～12：00
総会	13：00～14：00
日本甲虫学会賞授与式・受賞講演	14：00～14：30
公開シンポジウム「甲虫類の知られざる生態—甲虫生態学最前線—」	14：30～16：45

趣旨：野外で甲虫を見つけるには、生息環境や出現時期、寄主などの生態に関する知識が不可欠である。私たち甲虫屋は、採集するための生態に関連した知識は豊富に持っていることは間違いのない。しかし、一部のグループの甲虫を除けば、室内飼育を含め甲虫の生き様を詳しく観察する機会は意外と少ないかもしれない。今回のシンポジウムでは、行動を含めた甲虫の生態研究を行っている研究者をお招きし、最新の研究成果を発表していただくことにした。このシンポジウムを通じて、甲虫の生態の奥深さ・面白さを改めて考える機会にしたい。

コーディネーター 林 成多

話題提供

「わかっているようでわかっていない！？ゲンジボタルの配偶行動」…川野敬介（下関教委）

「イモムシハンター・クロカタビロオサムシの得手不得手」…杉浦真治（神戸大院・農学）

「闘う、飛ぶ、それとも物陰に潜む？ヨツボンケシキスイのオスの巧みな戦術」…岡田賢祐（岡山大院・環境生命科学）

「アカマダラハナムグリは鳥の巣で育つ」…越山洋三（フィールドデータ・岡山県赤磐市）

討論 「甲虫の生態研究は面白い」

懇親会（ホテル日航倉敷） 18：00～20：00

第2日：11月23日（日）

標本同定会（公開）・ポスター発表	9：10～10：50
一般講演（口頭発表）	11：00～12：00, 13：00～15：45
分科会	16：00～17：00

*時間は都合により変更する可能性があります。

参加費（予定）

- ・大会参加費 1,000円、高校生以下は無料（ただし、要旨集実費）
- ・懇親会費 一般7,000円、同伴者・学生5,000円

参加費は当日徴収しますが、本大会は事前申し込みが原則です。懇親会は、飛び入り参加はできません。

参加および発表申込み

できるだけ電子メールで次のように行ってください。トラブル防止のため、返信をご確認ください。メールでの申込みができない方は、事務局（担当：奥島）までファックスか郵便でお申込みください。

申込み先アドレス（奥島、ただし9MBまで）：musoku@city.kurashiki.okayama.jp

〈大会・懇親会参加申込み〉

10月11日までに、次の内容をお知らせください。

- 1) 氏名
- 2) 一般・学生の別
- 3) 所属名（名札に入れます）
- 4) 専門分野（名札に入れます）
- 5) 連絡先住所
- 6) 連絡先電話
- 7) メールアドレス
- 8) 懇親会参加の有無（同伴者の有無）
- 9) 予約宿泊施設名および宿泊日（倉敷市内のみ、補助金申請のためご協力お願いします）
- 10) 同定会講師の協力の有無

〈発表申込み〉

8月31日までに、口頭・ポスターの別、発表題目、共同発表の場合は全員の氏名・所属と発表者氏名をお送りください。ただし、時間・スペースがいっぱいになり次第、受付を終了させていただきます。なお、申込み件数が多い場合には、発表者1名につき1題とさせていただきます場合があります。10月11日までに、講演要旨（全角40字×14行以内、図含む）を提出してください。

〈分科会申込み〉

8月31日までに、世話人と分科会名をお知らせください。パソコン、プロジェクタが必要な場合はお早目にお申込みください。最大6会場です。

〈広告の掲載〉

講演要旨集（B5判、200部発行予定）に掲載する広告を募集します。半ページ5,000円、1ページ10,000円です（モノクロ）。10月11日までに、そのまま印刷できる電子データをお届けください。

発表者の方へ

〈口頭発表〉

1題につき15分間、発表12分と質疑3分とします。発表が終わりましたら、次の講演の座長をお願いします。大会の使用パソコンはWindows 7、ソフトはPower Point 2007を予定、ファイルの保存メディアはCD-R、DVD-R、USBメモリが利用可能の見込みですが、詳細は9月案内をご確認ください。必ずウィルスチェックを行い、事故に備えてバックアップをおもちください。ウィルスが発見された場合には、発表をお断りすることがあります。動画再生をご希望の方はあらかじめご相談ください。

〈ポスター発表〉

1題につき縦172.5cm×横115cmのスペースに収まるようにご用意ください。大会1日目の朝から掲示可能ですので、ご自身での掲示をお願いします。掲示用品は会場にあります。ポスター発表の時間帯には、できるだけ会場で説明をお願いします。2日目の分科会開催前までにご自身で撤収をお願いします。

〈分科会〉

分科会での講演者の方もできるだけ講演要旨の提出をお願いします。発表機器の操作はそれぞれの分科会で行ってください。会場は当日ご案内します。

〈標本同定会〉

甲虫類標本の同定会を行います。ご所蔵の同定未解決の標本をお持ちよりください。なお、同定依頼する標本は必ずマウントされ、データラベル付きのものにしてください。

その他

★大会参加者の方は会期中、倉敷市立自然史博物館の展示がご覧いただけます（9：00～17：15）。受付で名札をお見せください。新着資料展開催中です。

〈前後泊される方へ〉

大会前日：11月21日（金）

★岡山大学附属図書館資源植物科学研究所分館（旧大原農研）が利用いただけます（9：00～17：00）。大会会場から南へ約200m。昆虫関係の古い文献が充実しています。コピー可（35円/1枚）。大会当日は休館日です。TEL 086-434-1204 URL <http://www.lib.okayama-u.ac.jp/ipsrlib/index.html>

★倉敷昆虫館の見学が可能です（9：30～17：00、13：00～14：00休）。大会会場から北東へ約1km。岡山県産の古い標本や地方の同好会誌などが充実しています。TEL 086-422-8207 URL http://www.shigei.or.jp/ento_museum/

大会翌日：11月24日（月・祝）

★倉敷市立自然史博物館の収蔵庫を公開します（9：00～17：00）。閲覧ご希望の方は奥島までご連絡ください。大会当日は収蔵庫のご案内はできません。

会場周辺には、美観地区、大原美術館、アリオ・MOPなどの大型ショッピングモールなどの見どころもたくさんあります。

宿泊案内および昼食について

事務局では斡旋しませんので、各自でご予約ください。会場周辺からJR倉敷駅周辺にかけては多数のホテルがありますが、例年混雑が予想される時期ですので、お早目のご予約をお勧めします。

参考サイト「倉敷情報ボックス」<http://www.kurashiki.or.jp/>

昼食については会場周辺のコンビニ、レストランなどをご利用ください。会場内では、休憩室を除き、食べ物の持ち込みはご遠慮ください。

交通案内

JR・自家用車利用の場合（右図参照）

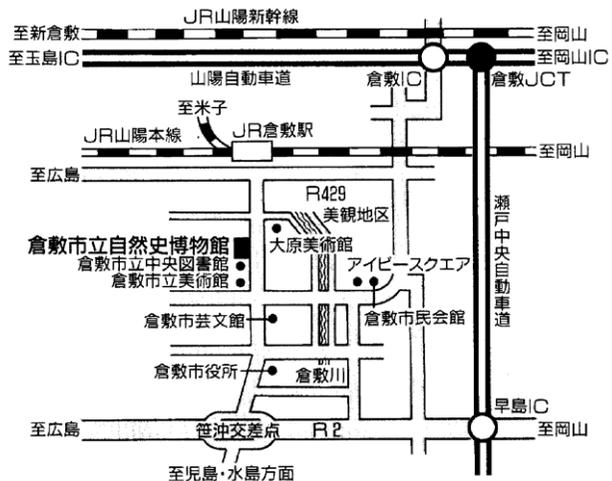
新幹線をご利用の場合は岡山駅か新倉敷駅で山陽本線に乗り換えとなります。自家用車の方はホテルの駐車場か有料駐車場をご利用ください。

岡山空港利用の場合（URL <http://www.okayama-airport.org/>）

岡山空港へは札幌・東京・沖縄から定期便があります。岡山・倉敷へは路線バスがあります。

高速バス利用の場合（URL <http://www.navitime.co.jp/highwaybus/33>）

倉敷・岡山へは関東以西の各地から高速バスがあります。



大会事務局

〒710-0046 岡山県倉敷市中央2-6-1 倉敷市立自然史博物館

「日本甲虫学会第5回大会事務局」担当：奥島雄一

電話：086-425-6037 FAX：086-425-6038

奥島e-mail: musoku@city.kurashiki.okayama.jp

日本甲虫学会第5回採集例会のお知らせ

2014年度日本甲虫学会採集例会を下記の通り開催致します。四国以外では採集しにくい甲虫を採集できる絶好の機会ですので奮ってご参加ください。

- 日 時： 2014年7月26日(土)～27日(日)
 場 所： 四国剣山周辺
 宿泊先： ラ・フォーレ剣山 徳島県美馬郡つるぎ町一字葛籠 6198-2 Tel: 0883-67-5555
 夫婦池の静かな湖畔に面した高原の宿です。
 費 用： 9,000円前後を予定
 申し込み方法： 連絡先の住所と電話番号(可能な限り携帯番号)・メールアドレスを添えて、下記の連絡先に申し込みください。前泊・翌日泊を希望される方はその由も添えてください。
 申し込み先： 採集例会担当幹事 大木 裕
 〒225-0015 横浜市青葉区荏田北 2-17-13
 Tel/Fax 045-912-0584 E-mail: bigtree@kf7.so-net.ne.jp
 現地幹事： 吉田正隆
 〒770-0047 徳島市名東町1丁目 295-1
 携帯 090-2890-2414 E-mail: konchu@sea.plala.or.jp
 申し込み期限： 2014年6月末日

現地で採集するには国有林への入林許可が必要です。現地幹事の吉田さんにとりいただきますので、連絡先の住所と電話番号をお忘れなく、申し込み期限を厳守してください。申し込みのありました方には、現地までの交通のルートなどをメールでお送りします(メールをお持ちでない方は郵送します)。入林許可証のコピーは、当日受付もしくは夕食時にお渡します。

この件に関するお問い合わせ・ご相談のある方は、採集例会担当幹事もしくは現地幹事までお気軽にお問い合わせ下さい。

2015・2016年度の会長および評議員選挙のお知らせ

日本甲虫学会の役員の任期は2年と定められており(会則第8条)、今年度は改選期にあたります。つきましては、会長ならびに評議員の選挙を実施します。8月公示、9月開票を予定しておりますので、ご承知おきいただければ幸いです。

(選挙管理委員長 岩田隆太郎)

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号、有頭ダブル針も出来ました。その他、採集、製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒142-0051
 東京都品川区平塚2丁目5番8号
 郵便振替 00130-4-21129
 電話 (03) 5858-6401 (ムシは一番)
 FAX (03) 3784-6464

(カタログ贈呈) (株) 志賀昆虫普及社

◇学会の発行物・バックナンバーの販売委託先◇

昆虫文献 六本脚

〒102-0075 東京都千代田区三番町 24-3

三番町 MY ビル 3階

TEL: 03-6825-1164

FAX: 03-5213-1600

E-mail: roppon-ashi@kawamo.co.jp

URL: <http://kawamo.co.jp/roppon-ashi/>

大阪秋季例会開催のお知らせ

2014年度第2回大阪例会を下記の通り開催いたします。皆様、多数ご参加ください。

日時：2014年9月27日（土）10時～16時40分

場所：大阪市立自然史博物館（大阪市東住吉区長居公園1-23）Tel. 06-6697-6221

HP: <http://www.mus-nh.city.osaka.jp/> 通用門よりお入り下さい。

プログラム：

10:00～12:00	自由懇談・同定会、大阪例会運営幹事会
12:00～13:00	昼食、休憩
13:00～13:30	会務報告会・例会事務連絡
13:30～15:30	講演
15:40～16:40	「一人一話」会
17:30～19:30	懇親会（場所：アサヒビアケラー・アベノ） 大阪市阿倍野区阿倍野筋1-5-36 Tel. 06-6641-6282

懇親会会費：4,500円（飲み放題）

講演：「日本産オトシブミ、チョッキリの多様性と問題点」

演者：沢田佳久氏（兵庫県神戸市）

要旨：オトシブミ科とチョッキリゾウムシ科はともに興味深い生態を持つことで知られる。一般化するというならば、産卵に際して植物の柔らかい部位を物理的に加工することに長けた群である。形態的には、触角や口器および腹部にゾウムシ上科の比較的祖先的な形質を残した群とみなされる。この上科の系統発生の早い段階で、顕花植物の適応放散に呼応するかたちで、その基本様式（形態や生態を含めた）を確立した群だと考えられる。なお生態、形態ともオトシブミ科とチョッキリゾウムシ科は異質であり、それぞれの単系統性には問題がある。現在のところ両者を区別して理解するのが現実的である。日本列島は、チョッキリゾウムシ科に関しては主要グループをほぼ網羅したファウナを擁しており（約70種）、非常に恵まれた観察地である。多様な形態と多様な生態の見事な対応が見てとれる。ただし未記載種、生態未解明種があり、多様であるからこそ全ての種について繁殖様式や幼虫の形態の解明が待たれるところである。オトシブミ科に関しては新世界（特に新北區）に見られる要素が大きく欠落している。限られた邦産種（約30種）は旧世界（主に東洋区）の多様性をよく代表したものである。国産の種は生態知見を含めほぼ網羅されている感があるが、幾つかの種について種生物学的な問題があり、要注意個体群が存在する。オトシブミ科はその生態とともに、特異な頭部の形態にも関心がもたれるところである。問題は、葉を加工するメスではなく、作業に関与しないオスの頭が長いことの要因である。それは闘争や視野確保との関連で理解することができる。

例会・懇親会の事前の参加申し込みは不要です。当日、例会参加者はお茶代・資料代として200円を徴収いたします。懇親会は当日受け付けます。

2014年度年末例会・忘年会の予定

年末例会:12月13日（土）10時～16時40分。自由懇談会・同定会、大阪例会運営幹事会、会務報告会、「一人一話大会」または講演会の予定。

忘年会（アサヒビアケラー・アベノ、17:30～19:30）の予定。

次回「お知らせ」で、一般講演の演題名を掲載希望される方は、8月24日（日）までに運営幹事までメールでご連絡ください。講演時間等は後日打ち合わせ致します。

（大阪例会運営幹事 安井通宏、メール：yasuimichihiromy@ab.auone-net.jp）

名古屋例会開催のお知らせ

2014年度第2回名古屋例会を、下記のとおり開催しますので、ぜひご参加ください。

日時 2014年8月17日(日) 午前10時～午後5時

場所 三重県環境学習情報センター1階研修室(四日市市桜町3684-11) 東名阪「四日市IC」から車で約15分。駐車場(無料)あり。

当日の内容

1 情報交換, 同定など(午前10時～12時)

2 講演(午後1時～3時30分)

(1) 稲垣正志「虫屋が知っておくべきデジタル写真撮影の基礎技術について」

(2) 大木 裕「横浜国大常盤台キャンパスの甲虫相」

(3) 新里達也・岡田圭司・平野幸彦「明治神宮の甲虫類」

3 一人一話など(午後3時30分～5時)

4 その他

(1) 車で来られない方は、近鉄湯ノ山線「大羽根園駅」から、車での乗り合わせの手配をしますので、運営幹事の生川までご連絡ください。

(2) 大会終了後は、懇親会も開催いたします。

(3) 昼食や飲物は必ず持参してください。



(名古屋例会運営幹事 生川展行 tritoma@mecha.ne.jp Tel 059-374-1054)

定期購読のご案内

昆虫用品は

むし社

検索

月刊むし

B5判, 56～80頁 毎月20日発売
定価1260円(送料100円)

「月刊むし」は、1971年3月に創刊された昆虫専門の月刊雑誌で、30年以上続いて発行されています。過去のバックナンバーの内容はむし社HPをご覧ください。
<http://homepage2.nifty.com/mushi-sha/>



520号 (2014年6月号)

カミキリ特集号

- コバヤハズカミキリ交配実験ノート (1)
- 西表島におけるカミキリムシ科の記録
- いわゆる「フナケシカミキリ」について
- 東京都目黒区におけるトラフカミキリ
- 茨城県で発見されたヨーロッパ産のホソカタムシ
- ラオスで最近採集された蝶 (11)
- 千葉県南部におけるオキナワイチモンジハムシの記録

「月刊むし」定期予約購読

本誌は一般書店での販売のほか、定期予約購読も行っております。定期予約の場合、送料は無料で、次のように誌代も割引となりますので、ぜひご利用下さい。

6ヶ月 予約 定価 7560円 → 7300円
12ヶ月 予約 定価 15120円 → 14600円
24ヶ月 予約 定価 30240円 → 29200円

お申し込み方法

郵便振替用紙に「月刊むし予約」と明記のうえ、下記の口座あてにご送金ください。

郵便振替口座 00160-5-159262 むし社
新規お申し込みは、当月発売分よりとさせていただきます。



月刊むし・昆虫図説シリーズ3

日本のオオセンチコガネ

- カラープレートには記録のある全44都道府県の標本を多数掲載
- 楽しいコラムや標本データ集も収録

著者：塚本圭一・稲垣政志・河原正和・森 正人
A4判, 上製本 112頁 (48カラープレート)

定価 6,912円

(税込み) [送料サービス]

むし社

〒164-0001 東京都中野区中野 2-23-1-209 Tel. 03-3383-1461~1462 Fax. 03-3383-1467